

2019. 9. 7

畑 啓之

「江戸時代の朝鮮通信使」が日朝両国にどのような影響を及ぼしたか？

いま、日韓関係が大いに悪化している。その原因は、太平洋戦争終結に至るまでの日本の占領政策に大きな原因があり、当時の遺恨が現在にまで尾を引いていると考えられる。ただ、恨みを生きる糧とするのは、韓国国民にとって非常に不幸なことだと思ふし、その遺恨を政治利用している韓国の政治家にも大いに疑問を感じている。韓国の多くの若者は海外へと留学し、その多くは学問の成果と人脈を携えて祖国へと変える。その彼らは、今の韓国社会をどのようにとらえているのだろうか？ 興味をもたれるところである。

隣国同士は助け合うこともあるが、往々にして利権がぶつかり合う。日本と韓国（朝鮮）の歴史的な関係は日朝関係史（Wikipedia）に詳しくまとめられている。それによると、日本は朝鮮を通じて多くの文化的影響を受けていることが分かる。またここに、「徳川政権による国交回復」と「朝鮮通信使」という項目がある。鎖国時代の日本であっても、朝鮮とは国交を樹立していたのである。

徳川政権による国交回復

秀吉の死後、日本では徳川家康による武家政権である江戸幕府が成立した。徳川家康は、秀吉の「唐入り」には消極的で朝鮮半島に派兵せず、朝鮮との国交回復を望み、宗氏を介して使節を派遣した。こうして徳川家康と李朝の間で国交回復の交渉が進められた。光海君は捕虜の送還や貿易交渉に応じ、己酉約条が結ばれて貿易が再開された。李朝は日本との正式な国交がある通信国となった。

朝鮮通信使

狩野安信『朝鮮通信使』大英博物館蔵。1655年・承応4年・孝宗6年
正式な国交がある通信国として、外交使節である朝鮮通信使も再開した。室町幕府に対しては4回訪日した朝鮮通信使が、江戸幕府では將軍



の代替わりごとに將軍家を祝賀するために来訪して、公式の外交関係が保たれた。通信使は第2代將軍徳川秀忠の時代から始まり、国交回復までの回答兼刷還使3回と通信使が9回、約200年に渡って合計12回の来訪を行った。

朝鮮通信使 (Wikipedia) より

江戸期朝鮮通信使履歴

回数	西暦 (元号)	朝鮮暦	将軍	朝鮮正使	名称	目的
第1回	1607年 (慶長12年)	宣祖40年	徳川秀忠	呂祐吉	回答兼刷還使	日朝国交回復、捕虜返還
第2回	1617年 (元和3年)	光海君9年	徳川秀忠	呉允謙	回答兼刷還使	大坂の役による国内平定祝賀、捕虜返還
第3回	1624年 (寛永元年)	仁祖2年	徳川家光	鄭立	回答兼刷還使	家光襲封祝賀、捕虜返還
第4回	1636年 (寛永13年)	仁祖14年	徳川家光	任統	朝鮮通信使	
第5回	1643年 (寛永20年)	仁祖21年	徳川家光	尹順之	朝鮮通信使	家綱誕生祝賀、日光東照宮落成祝賀
第6回	1655年 (明暦元年)	孝宗6年	徳川家綱	趙珩	朝鮮通信使	家綱襲封祝賀
第7回	1682年 (天和2年)	肅宗8年	徳川綱吉	尹趾完	朝鮮通信使	綱吉襲封祝賀
第8回	1711年 (正徳元年)	肅宗37年	徳川家宣	趙泰億	朝鮮通信使	家宣襲封祝賀
第9回	1719年 (享保4年)	肅宗45年	徳川吉宗	洪致中	朝鮮通信使	吉宗襲封祝賀
第10回	1748年 (寛延元年)	英祖24年	徳川家重	洪啓禧	朝鮮通信使	家重襲封祝賀
第11回	1764年 (宝暦14年)	英祖40年	徳川家治	趙曦	朝鮮通信使	家治襲封祝賀
第12回	1811年 (文化8年)	純祖11年	徳川家斉	金履喬	朝鮮通信使	家斉襲封祝賀 (対馬に差し止め)

朝鮮通信使がどのようなものであったかは、書籍にもまとめられている。たとえば、

書籍「江戸時代の朝鮮通信使 (李進熙、1987年)」のまえがきより

まえがき

「赤い花なら曼珠沙華、オランダ屋敷に雨が降る……」。この歌が長く愛されているのは、長崎放つ異国情緒と自由な雰囲気、人びとの胸にはのほかな希望の灯をともしてくれるからだろう。そこには、江戸時代は暗くて八方ふさがりの「鎖国の世」だが、長崎のみは海外文化と接することができる希望の町だったという思いが秘められている。

だが、徳川幕府が「鎖国」した相手はヨーロッパ諸国と清国であって、朝鮮国とは正式な国交を結んでいた。釜山の草梁倭館には五、六百人の日本人が常駐し、年間を通じて五十隻をこえる日本の貿易船が出入りした。また、外交実務を担当する釜山の東萊府と対馬藩は常時連絡をとりあい、両国でおきた大きな事件や災害、将軍家や李王家の吉凶、諸外国の動静についての情報をそのつど交換した。江戸時代を「暗い鎖国の時代」と描くのは誤りなのである。

両国の善隣関係を象徴するのが徳川将軍の代わりやってくる朝鮮通信使であった。通信使は「信使」ともよばれ、両国間の「信」を通わす。使節で十二回にのぼった。正使・副使・従事官とよばれる三使と、第一級の学者、医者、画家がくわわる総勢五百人の大使節団である。

六隻の船に分乗した一行は対馬藩の護行をうけ、対馬から彦岐、福岡の相島(藍島)、下関(赤間関)、上関を経て瀬戸内を通り、大坂に入る。その先は徳川幕府の用意した川御座船で淀川をさかのぼり、淀で上陸。あとは陸路京都をへて江戸へむかう。護行する対馬藩士八百人と奥や駕籠の昇夫、馬夫、人足を合わせる二千人をこえる大行列となる。

通信使の接待には莫大な費用を投じなければならぬが、幕府は「将軍一代の盛儀」としてこれを重んじ、今日では想像もつかないほどの歓迎陣をはった。また、通信使の泊まる使館には、各藩の学者や医者、画家が馳せ参じ、酒を酌み交わしながら、華やかな交歓をくりひらげた。それは、唯一の修交国である朝鮮の使節だということだけでなく、朝鮮の文化や学問とじかに接する絶好の機会だからである。

江戸時代の日朝関係史研究に大きな業績を残した中村栄孝氏(名古屋大学名誉教授)は、各使節での交歓についてこう述べている。

朝鮮使節団の入国があると、日本の文化人たちは、治道の旅館に馳せ集まり、饗応の席上はもちろん、滞在の間に相きそって同文の異邦人に面接をもとめ、漢詩の唱酬に歡をつくし、書画の揮毫をこい、また、筆談によって中国や朝鮮の政情をさぐり、歴史や風俗をたずね、経・史・諸学の問答をかわすのが例となっていた(「朝鮮」吉川弘文館)。

その結果は、「桑韓唱酬集」とか「韓答筆語」、「桑韓医談」といった問答集にまとめられ刊行されるのだが、その数は「百数十巻にいたる」(「通航一覽」)ほどであった。また、おびただしい数の漢詩の書や絵が残され、その一部は使館となった各地の寺に現存している。

にもかかわらず、二六〇年にわたる両国の善隣関係や通信使の往来については、ほとんど知られていないのが実情だった。それは、高等学校の日本史の教科書や概説書が両国間の平和な関係、とりわけ文化交流についてまったくといってよいほど、ふれていなかったからである。そういう筆者も、通信使のことを知ったのは二十数年前にすぎない。

また、たとえば、

書籍「上月家文書 享保4年朝鮮通信使饗応記録（上月香澄、上月昭信（2008年）」

享保4年（1719年）は第9回の朝鮮通信使である。兵庫県加古川市に円照寺という寺があり、この寺に伝わる古文書の一つが掲題の記録である。住職の名・上月義宗より上月家文書と呼ばれている。目次は右のようになっている。大名行列以上に贅を尽くしたもてなしであったと思われる。

目次

1. はじめに
2. 文書の時期と性格について
3. 朝鮮通信使に関する饗応記録について
4. 上月家文書の献立について
 - (1)膳具・高盛・亀足について
 - (2)料理について
5. 饗応料理の献立の比較について
 - (1)七五三膳について
 - (2)引替膳
6. 上月家文書にみる朝鮮通信使の編成について
 - (1)朝鮮通信使の編成について
 - (2)上月家文書にみる朝鮮通信使の編成について
 - (3)上月家文書と他の史料との比較
7. 「享保4年朝鮮通信使饗応記録」がなぜ上月家（円照寺）に残されていたのか。
8. まとめ
9. 上月家文書「享保4年朝鮮通信使饗応記録」原文
10. 上月家文書「享保4年朝鮮通信使饗応記録」翻刻

あとがき

いかに多くの費用が必要であったか、その一端は稲美町史(1982年)よりうかがい知ることができる。姫路藩に割り付けられた朝鮮通信使(第10回)費用は2万両であった。姫路藩寛延の大一揆の原因の一つにもなった。

寛延二年（一七四九）姫路藩全戚に一大揆がおこり未曾有の大事件となった。この事件に町域野谷新村的伊左衛門が大きな役割を果たしている。すなわち、寛保元年（一七四一）十一月、陸奥白河の城主松平明矩は姫路に所替を命ぜられ、翌二年六月に到着入部した。しかし、この松平明矩は、白河藩において領民の誅求によって一揆の洗礼を受けたまま姫路に入ったのであり、彼の治政は姫路においても多くの問題をひきおこした。たとえば、検見取りによって増徴をはかったのをはじめ、白河からともなってきた特権商人を優遇し、領内に御用金を課した。また藩財政の悪化によって莫大な借金を背負いこむことになったという。寛延元年（一七四八）朝鮮使節の接待を仰せつけられた明矩はさらに領内に二万両もの御用金を課した。

折悪しくこの寛延元年は早魃のうえ暴風雨の被害などで半年の半分の収穫もなく、百姓は年貢納入にあえいでいた際でもあり、たまたま、明矩が十一月十七日に病没し、子朝矩があとをつぐはずのところ、幼少の故をもつて所替を命ぜられるに至った。所替を前にして、年貢の納入は一層厳しく命じられ、このような藩庁の動きに反撥して、同年十二月には姫路の市川河原におよそ三千人の百姓が集結し、不穏な動きを見せるに至った。これに対し姫路藩は説得にあたり、おも立った百姓から意見を聞くとしてこれを解散させたが、彼らの多くが入牢の憂日であった。

そこで、形勢はますます不穏となり、本格的な一大揆の最初の行動が翌寛延二年正月十六日、加古郡西条組の大庄屋沼田平九郎宅の打ちこわしをもって開始されるに至った。このうちこわしに大きな役割を演じ、組織したのが西条組野谷新村的伊左衛門である。彼は草谷村伊左衛門の伴で当時六一歳、持高九石余りの百姓であった。

一、姫路藩寛延の大一揆

第三節 百姓一揆と村方騒動

朝鮮通信使を通して江戸時代の日本が多くのものを得たことは間違いがない。国交はギブアンドテイクである。朝鮮も日本から得るものがあった（朝鮮通信使、Wikipedia）。